

九大比文震災プロジェクト

シンポジウム(2012年3月8日)

「東日本大震災の現場を知る-震災後一年、そしてこれから」

【日時】 2012年 3月8日(午後4時30分開演～8時50分終了)

【会場】 アクロス福岡 7階 大会議室

第一部 講演

(3)吉岡 斉(九州大学大学院教授、政府事故調査検証委員会委員)

「福島原発事故はどうして防げなかったのか」

司会：それでは三人目の講演者を紹介させていただきます。東京電力福島第一原子力発電所の事故を受けまして設置された政府の事故調査検証委員会の委員を務められており、九州大学の副学長、そして我々九州大学の比較社会文化研究院の教授でもあられます吉岡斉先生にお話を伺いたいと思います。吉岡先生よろしくお願いいたします。

吉岡：よろしくお願いいたします。今日は多くの方がご参加いただきまして感謝いたします。私は写真がないんですけども、写真がない一つの理由は東京電力が現地の写真を撮らしてくれなかったというようなこともありまして、文字だけですけどもお許しください。セキュリティというか、テロリズムというかそういうのでというようなことらしいですけども。で最初に、一番上が私たち事故調が出した中間報告で、12月26日、年末に出して。実はこの数日前に、ジャーナリストに事前のレクチャーをやって、700ページと大部ですので、記者たちはクリスマスがつぶれたとかそういうようなことを言っていました。これの英語版が今出てると思います。英語版は日本語を英語にすると膨れるんで800ページを超える大作になっております。で、下のほうは民間事故調というのが作ったやつで、これは私はアドバイスくらいしかしてません。時間がないので次に行きます。私、現場はあまり入らしてくれないんで、六月に第一第二を回ってきましたけれども、数えてみると福島に行ったのは一年間で6回ですね。来月に飯舘と浪江、南相馬、この三つの市町村の村長とかそういう人に現地に、まあ移転してる場合が多いわけですけども、ヒアリングに来月行くことになります。で、そういうことを通して現場を見てやはりいろいろ感じるところというのはありました。そういうこともこの話に若干反映するかもしれません。

いかにひどかったか

(1) 最悪のシナリオの可能性

私たちが一番感じたことというのは、最悪シナリオにはなっていない、これで済んだのは非常に幸運だったという。これで済んだというのは、先月の下旬でしたか、南相馬で研究会があって、桜井市長が出てきて。桜井さんの前に私話したんだけども、不幸中の幸い

だと、言ったわけですが。不幸というのは同意しましたが幸いというのはきついなあと、そんなコメントをしております。それはやはりそこで避難している家族、家が非常に多くて、家族離散というのは当たり前で、むしろそれがマジョリティのようになっているようです。それと市役所の職員ももう数百人辞めちゃって、病院関係者も数百人辞めちゃったと。市が町がどうやって再建していくかという目途が立ってない。そういうことで、幸いと言われることには同意しないと、そんな感じでした。しかしより離れた地点から見れば不幸中〔の幸い〕、特に首都圏住民から見れば。私は九州大学に20年以上勤めておりますけども、いまだに福岡都民的な生活をしていて、その点では九州に大部分いる方よりはこの事故というのは非常に敏感に、感度は高かったわけです。首都圏よりもさらに仙台くらいのほうが高いみたいですね。仙台や女川にも言っている話を聞いてきましたけども、で最悪の場合には首都圏大避難というようなことが十分にあり得たということがこれまでの調査とか、あるいはいろいろなヒアリングとかそういうことで知識としてわかっております。

実はその可能性に私自身が気付いたのは、3月15日に2号機と4号機が爆発してからですけども、これはもしかしたら大変なことになる。結局は1・2・3・4とやられたわけですけども、1・2・3は格納容器に比較的小さめの穴が開いたので収まると、穴は開きましたけど。あれが大破壊をするとある程度放射能漏れが何十倍、数倍、数十倍というようなことで、で4号機も危なかったのは、核燃料貯蔵プールに5年分くらいの核燃料があって、これが崩壊した場合には同じように、もっと大量のものが出るかもしれない。1・2・3・4それぞれ非常に危なかったんですけど、4号機のプールの崩壊というのと2号機のベントがうまくいなくて格納容器の大爆発という、この危険性というのが現実のものとしてあったわけです。そうすると、3月15日には東京電力が撤退したいというようなことを菅首相に伝えて、菅首相はそんなバカなことってはいかんというようなことで、死んでも残れというふうに言って、統合対策本部という、東電本店に乗り込んで行って合同の本部を作ってそこで何とかしようとするわけですけど、その頃官邸の一部の人はそういう連鎖的な大破壊というのを〔考えて〕いたようです。吉田所長もどうもそれを考えていた、だから総員退去しようとした。総員退去の意味についてはその後意味論争が起きてまして、東電の人が最低限の要員を残して避難と、それを菅さんは全部逃げると〔解釈した〕。まあわたくしから見ればほぼ同じだと思いますけど、少々残して逃げたって事故には対処できないから結果として全部逃げるのとそう変わりはないと思いますけど。そういう状況まで追い詰められたわけです。一つが大破壊をすると急性放射線の障害の危険性というのもリアルに生じますので、みんな逃げて注水作業も中止になって次々に大破壊を起こして六基の原発が全部お陀仏になると。風向きによっては、12キロ南のほうに第二原発というのがあって。第二原発は放射能はだいぶ降りましたがそれほどではないという。私が行った六月では第二原発のほうは普通のマスクと普通の帽子と普通の手袋でよくて、第一のほうは防護靴と特殊防護服を着て全面マスクを被るわけですけども。

福島第二も、第一が十数倍も放射能を出してそれが風に乗ってやってきた場合には当然居れなくなって、それも含めて十基大破するかもしれない。そういうのを3月16日に共同通信か何かで流して、それが証拠として残ってますから。15日くらいに下手するとと本気で考えて震えてたわけですけども。もしそれが起こってれば首都圏が、いろんな関係者が言ってますけども、3000万人避難というのも。私個人としてはどうする？という電話をもらうことが何件かあって、私のような年寄りはいいから子供がいて頼りになる知り合いがいるなら逃げたほうがいい、と言いました。それで何人かは逃げたようです。大人のほうは私と同世代、友人とか元の高校の同級生とか逃げなかったようですが、それはそれでしょうがないと。それだけの危機があったということがわかってきました。それをテレビなんかでは「今のところ大丈夫です」と。今のところはそれは今言ったようなことにはなっていないわけですけども、その辺の見通しというのが非常にわからない状態のもとで今はというようなことを言ってもしょうがないと、将来どうなのかを明らかにしなければならぬとテレビの報道としては問題を残したということですね。

で、ほかの原発も危なかったというのがいろいろ見てわかってきて。福島第二が、これも間一髪だったらしくて津波の波高は敷地より下なんですけれども、坂を上って津波が大規模に敷地一帯に侵入してポンプとかを停止させたというような。これは幸い外部電源が、外部からの送電線が地震で四つのうち三つ壊れたんですけど、一つだけ残ってた。これが第一との最大の違いで、これを利用して何とか壊れたポンプやモーターを、外から運び込んで導線をつないで何とか再稼働というか冷却系を開通させたということで守られたと。で東海第二も、これも危なくて、5メートルの高さの防護壁があったんですけど、これを昨年6メートル、6.1まで高めて、来た津波が5.4という。高めてなければ福島第一と同じになって、こちら全電源喪失、東京にはずっと近いですから困ったことになったろうなという風に思います。で女川が、これも危なかったという。結果としてはいろいろ壊れてますけど、問題は波高が13メートルで敷地は14.8あったんですけど、1メートル陥没をして13.8、80センチの差で首の皮が繋がったと。外部電源は五つのうち四つ壊れてひとつだけ残ったと。で原町火力、これは福島第一よりひどい破壊ですけど石炭火力だから止めて大したことはなかったということです。浜岡は参考のために行きましたけど、今回はそれほど被害は、ほとんど被害は受けておりません。地震で若干損傷があった程度です。でいろいろ回ると会社のカラーというのが出てきて、浜岡が一番よくやっているとしました。まあ一番よくやっても、彼らの言い方で世界一危険な立地点に我が原発は位置してるから、世界一厳しい安全対策をとってるんだと力をこめて言ってたんですけど、あの地震じゃ無理だなという気はしますけれども、でも努力してるのは認める、東電よりずっとよくやっているとするのは事実として伝わって〔きました〕。

## (2) 復旧の困難

で復旧のシナリオ、これは、ないんですよ。事故収束というのはできない。医学者の

友人とかも私多いんで、たとえば白血病とかで、治癒という概念がありますけども、一時的に進行が止まる状態を寛解という風に言います。今のは水かけて何とか抑えてるだけで、寛解であって。寛解がまたぶり返すのをどうなのかというと、私はすっかり再発といったんですけど、医者は専門用語ではそうじゃないという、再燃というんですよね、再び燃えるという。非常に当たってるような感じで、何か起これば再燃するかもしれないと。まあ時間がある程度あるから再燃すればこれは大変ですけども。四号機プール崩壊したらもうもうと放射性ガスが立ち上って辺り一帯全部逃げなきゃいけないとかそういうことになる可能性があるのがちょっと心配ですけども。今は寛解で、そうならないように、マグニチュード8の巨大余震が来ないように願うばかりです。

問題は格納容器も圧力容器も両方やられてて、三台ともやられてて、四号機はもうあんな状態ですから、ああいうものに対して一体いかに解体撤去できるのかと。これはできないというのが私の前から言ってることで。スリーマイル島の場合には格納容器はちょっと割れたんですけど、これ1979年の地震ですけど、格納容器がちょっと損傷したけど内側の圧力容器は生き残って、これを十分冷やしてからふたを開いて、中のどろどろに溶けた、核燃料デブリといいます、これを取り出して、11年でデブリのほとんどを取り出したわけですけど。今度の場合には格納容器まで大量に飛び散って、しかもどこに核燃料デブリがあるかもわからない、こんなの絶対無理だという風に思います。水で満たして作業しなきゃいけませんけど、格納容器の場合高さが35メートルくらいあって、しかもその外に出てるものがあるでしょうから、さらにその格納容器の外側に水槽みたいなのを作ってそこに水張ってちょん切って一つずつ取り出していくと、こういうことしか理屈上は考えられないんですけど、これはもう無理だと思います。

で、いくら解体撤去費がかかるかというと、これは5兆円とか6兆円とかそういう数字が出てますけど、原子力の世界ではだいたい一桁間違える、一桁低めに査定するのが普通で。ある原子炉は340億円でできるといわれてましたけど、1兆円かかっている。炉の解体撤去、これできないけど、ある程度やるにしても、数兆円くらいかかると。それと廃棄物の処分、これは原子炉建屋以外については一応可能です。これも数兆円。土を掘って汚染土壌を掘るとというのが例えばある試算ですと80兆円で、それを埋めるのが20兆円と。本気でやればそのくらい、100のオーダーに乗るかもしれない。本気というのは基準がありまして、六ヶ所村の低レベル廃棄物処分施設、今から考えるとあれすごくよくできて、半地下構造の頑丈なコンクリートプールにドラム缶を秩序正しく埋めていって〔上から〕かぶせると。この方式でいうと、全部福島汚染土壌をそれでやると80兆円かかる。だからまあこれは実質的に無理だろう、どっかで値切るとか、どっかで適当に穴掘るとかそういうようなことになるんじゃないかと非常に懸念されます。

### (3) 被害の大きさ

被災者が非常に多いということで、まあこの話は、前半部がこの事故がいかにひどかつ

たかということをして、二番目は、なぜ防げなかったのかという。そろそろあと20分なんでそろそろ後半の話に移っていかないといけないわけですけど。まああらゆる人が避難をして、被害を受けていると。急性放射線障害による死者というのはいないんですけど、今のところ確認されてませんが、救援に行けなくて死んだ人とか、避難中に死んだ人とか、大熊町の二葉病院なんかは非常に悲劇的なケースだったわけです。で十数万人がいまだ避難生活を送っていると。作業員は従来基準の何倍も何十倍もの被ばく。周辺住民は従来基準の20倍に基準を緩められ、それでも生活をしている、こういう人は数十万人ですね。で飲食物の汚染とか、あるいは汚染水、汚染土壌の処分の問題と。で都市住民も非常に困難に直面した。特に福岡都民である私にとっては計画停電というのはまた一定の打撃でした。一定というのは、私の東京の家は板橋区成増にありまして最初の二週間くらいはあそこも計画停電という。23区の中であそこと足立区だけ計画停電になって、埼玉県とか神奈川県は容赦ないんですけど、23区のうち21区だけが特別扱いで、私のほうは外れちゃってひどい目にあいました。で、国民負担というのが今後、手抜きをするにせよ何十兆円と。残念ながらその多くは若者たちが払わなきゃいけないという、何も悪いことしてないのに。私のようなまだ年寄りではないですけども、もうすぐというか十年後には高齢者のカテゴリーに入るわけで、そんなに長くは払えないという、気の毒なことで。

## なぜ防げなかったのか

### (1) 背景的要因

事故の原因についてこれからお話しますが、地震津波大国という不利な条件の下にあえて造ったと。東日本、あの太平洋岸一帯というのは相当厳しい状況にあったんですけどそれでも作っちゃったと。造った理由は東京電力管内に関東地方に近いということとまとまった土地があったと、それぐらいの理由でとにかく造っちゃったと。浜岡は世界一危険ですけど、一つのサイトに多数の原子炉を造ったというのが。このおかげで、1・3・2の順で崩壊していったわけですけども、1の爆発によって3のために準備していたベントラインとか注水ラインが壊れると、3が崩壊したらまた2のための準備やってた分が崩壊するとかそういう連鎖的な。しかも全体として多くの作業員が逃げてますから、東電の本社の社員、東電社員と一部の協力会社だけ残ってあとみんな逃げてますので、少数の人間で次々と起こる爆発に対処するというので、対処能力をはるかに超えていたという。いくつも持つというのはどんなに危険かということだと思います。それとマークというのは、GEというアメリカの会社が64年に原子炉大出血サービスをやるわけですね。すごい安い価格で固定価格で全部完成品を電力会社に渡しますというそういう商売をやるわけですけど、その際にすごい安手で作ろうということで作ったのがマークで。上にフラスコ、下にドーナツ、あとはパイプでつないで、あのフラスコの下に循環ポンプという、いかにも今から考えるといかにも安手で何でこんなもの作ったんだと。美しくもないし、その

後マーク ではちゃんと釣鐘状になってるんですけど。当時 GE は後発組でウエスチン・ハウスを追いかけて、できるだけ安価に圧力容器はできるだけ小さく格納容器も小さく、それでああいう変なツギハギ細工みたいなものを作っていたわけです。それと老朽化した、まあ41年生です、1号機は。人間でいうとどのくらいかということ×2くらい、当てずっぽうで言ってるんですけど、そういうのを平気で運転している。で核燃料用プールが斜め上にあるというこういう構造、それから緊急事態へのハードウェア、海水ポンプを無造作に標高の低いところに〔置いて〕いると。こういう背景的要因があります。でここで背景的要因と書いたのは、直接今度の事故に因果関係があるとまではいえないかもしれないと。今度の事故と直接因果関係のあるものだけをちょっと背景とは別にあとで言います。相関関係とか間接的な関係は明らかなんですけれども、直接的かどうかはわからないというのを。

もう一つ組織面での背景的要因で、まあ全然災害対策の法制がレベル4くらいの事故しか予想していなかったと。で安全規制行政機関が無能力をさらけ出したと。特に問題になったのは班目委員長が爆発しませんと言って水素爆発を起こしたとか、保安委員長が寺坂さんという人ですけど、菅さんにいろいろ聞かれて音を上げて私経済学部ですから何もわかりません、何もわからんとは何だと。あるいは SPEEDI というデータはずっと流れてたのが、誰もそれを避難計画に〔活用〕しなかったと。安全規制機関及びその専門家が無能力をさらけ出したと。東京電力の危機管理体制、こういう時には東電全社およびほかの電力会社の協力を要請して、全電力をかけて取り組むというのが本来のあり方なんでしょうけど、関係者が集まるというシステムしか作られてなくて、結果として有効な指示を出せなかったと。現場がほとんどすべてをやることになったというような。現場ですべてを。第一では吉田所長ですけども。吉田所長ってなんかワンマン所長だったみたいで、彼が気付かなかったことは結局あの第一では行われなかったという、そういう結果に。あるいは当直が独自に判断をして上にも知らせずにとかそういうようなこともあったようです。

## （２） 直接的原因

で直接的原因ですけど、指揮系統の機能障害という。まあ政府、いろんな本部を作るわけですけど、結局どれも動かなかったと。首相官邸には誤解に首相執務室があって地下一階に危機管理センターがあるんですけど、その間は固定電話2本しかなくて、携帯はつながらないという構造になってたようです。これはあえてつながないようにしてるんだそうです。スパイが入り込んで連絡取りあっちゃ困るだろうと、そういう配慮。両者の連絡がほとんど取れなくて、実質的な部隊がいた一階の危機管理センターというのは機能できなかったと。首相執務室のわずかなスタッフで、幹部級の大臣クラスも五階にはいたわけですけども。それと、法律にはない東電の本店があって、ここにはテレビ会議システムが現地とつながってたわけですけど、ここからも、いろいろ聞き取りやったところ、事故を抑えるのに効果的な指示というのはほとんどなされなかったと。第一原発の免震重要棟と

というのが、これがあつたことは非常に重要です。2010年に作られてて、これがなかったら対策一切不可能であつて。これが2010年に建つたから、一つだけ拠点が残つたから何とか軽くなつた。これがなかったらダメなんですけど、これがあつてもわずかなスタッフで、東電から数百人送り込めなかつたわけです。本来当然増派をしてあらゆる有能な技術者を連れてくるのが本来の姿だと思うんですけど、そんなことしないで現地だけでやっちゃつたという。こんな形でほとんど現地で、上のほうは何も機能してなかつたと。国際化センターというのが至近距離に作られてたつて、数日後に逃げようや逃げようで先に逃げちゃつたという。チェルノブイリの時はソ連邦全体で収束作業が行われたんですけど、今回の事故では危機管理能力の欠如というのが非常に明らかになりました。

それと対処ミス。これは1号機、2号機・3号機・4号機でどう間違えましたかというようなことが事故調の調査で明らかになつたけれども。事故調の場合には1号機はひどくて。非常用復水器という電気で動く緊急冷却装置と、電気じゃなくても動く冷却装置があるんです。で後者については第一では非常用復水機だけが動いたわけですけどこれが津波が来て弁が閉まつてしまつた。それに気づかずに弁が開いてるもんだと思つてのんびりしてたら当日中に炉心溶融、メルトダウンを起こしたと。最初危ないのは2号機だと本部は思つてたわけですけども。2号機の隔離時冷却系っていう、これも電気がなくても動くというやつだったんですけど、これも止まつてると本部は思つてたんですけど、こっちは動いてたと。だから最初は2号機が危ないと本部は認識してたと。1号機がメルトダウンを起こして翌日あっさり爆発したと。

でそのあと3号機が危なくなつて、3号機の場合には、隔離時冷却系が最初動いてたんですけども、それが止まつちゃつたと。しかし高圧注水系というもう一つの、タービンで動く、電力があまり要らないのが動いてたんですけど、これを止めちゃつて、もっと普通の冷却系を稼働させようとした。普通の冷却系というのは、ディーゼルというんですけど、これは非常用のディーゼルで低圧の水を流し込むというそういう装置もあるんです。つまり原発というのは今回調べてわかつたんですけど、いくつもいくつも安全装置、この注水装置が壊れたらこれもあつると、いくつもついてるんですけど、今回あっさり全部やられちゃつたという。いくつもついてるから安全だと思ひ込んでたのは誤算であつて、これを高圧注水系を長時間動かすのはよくないからこれを止めて別の注水系を使おうと思つて止めちゃつたんです。で別の注水系も動かなくなつちゃつた、で焦つてこれを再び動かそうとしたら動かなくなつた。これは最初に動かす時に駆動させるときに直流のバッテリーの相当の電源が要ると。動いてるうちは勝手に動いてるんだけどいったん止めて再稼働するときには直流のバッテリーが要る。これがもう消耗してて起動できない。で結局全部冷却系を失つて14日にドカンと。これは水素爆発でドカンといつたのか、それとも核燃料プールが暴走したのかとかいろいろ説があつたんですけども、冷却系が全部止まつたというところですのでダメ。そういう二つの爆発です。

2号機についてはベントラインを作つてたんですけども、これも能力ですね。数百人し

かいなくて全部やるのはだめだと、まず1号機に集中、次に3号機に集中で、2号機は準備はしてたけど待機状態に置いてた。爆発したら待機状態に置いてたベントライン、注水ラインがめちゃめちゃになったとそういうようなことで、結局時間的に間に合わずに2号機も崩壊してしまった。

4号機はああいう状態になるまでプールの危険性については知ってたんだけど問題意識として不足して。そうして四つ全部やられちゃったと。これを後知恵できちんとやればこんなにはならなかったんじゃないかというようなことはさんざん議論したんですけども、やっぱりわからないねというような。わからないことは書かない、不確実なことは書かないというのが、政府の報告書の原則のような気が。でももしかしたら三つの原子炉がやられてプールがやられても2号機は救えたんじゃないかとそんな議論も私らの間ではしてますけれども。対応が非常にまずかったということはどうも明らかです。

それと事前の安全対策、地震対策が不十分。地震で原子炉本体が壊れたという人もいますし、しかし今のところそれは不確かであると。数年後あるいは十数年後に放射線レベルが下がって実地調査すればわかるでしょう。あるいはわからないかもしれません。本体が壊れたかどうかはわかんないんだけど、送電線とか連結器とかそんなのは大破壊が起きてたということでこれで全電源喪失。そういうところで非常に大きな影響があったと。でこれがあんまり対策が行われていなかった。

それともっとひどいのは津波対策が不十分で、ほとんど津波対策というのは立地指針の中では軽んじられていてごくわずかな記述が。しかも高い津波が来るかもしれないぞというようなことを地震学者が過去何回か警告をして、それについて東電が検討したんだけど棄却するというそういう形で。どうせアカデミックな可能性なんだから現実には来ないと棄却をして。その棄却の先頭に立ったのが事故時に副社長をしていた方と吉田所長という、そういう二人が圧力を押し返してあのままにしておけというようなことです。武藤副社長と吉田所長、当時は武藤副本部長と吉田部長なんですけれども。

それと過酷事故マネジメント対策が非常に不十分だったというようなことで。これは過酷事故が起きた場合にどのように対処するかのマニュアルがあるわけですけども、マニュアルがあってハードウェアが備わってる〔はずなんですけれども〕、ハードウェアがほとんどなかったという。あわてて今装備しようとしてますけど。でマニュアルなんかを見せてもらったこともあるんですけども、全電源喪失でどうなるかというマニュアル、紙マニュアル。電子マニュアルは電源が切れると使えないから、紙で懐中電灯でというようなことなんですけど。そこに書いてあるのは計器を読み上げてごく簡単な操作を続ければどんな悪くても十時間で全部というそういうマニュアルで。今回の場合は多分それやってたんでしょうけど、十時間たっても二十時間たっても三十時間たっても復旧しないということで、全然役立たないマニュアルで。ベントをどうするか、どういう場合にベントするかとかそんなことは何も書いてないで単に計器を見て簡単な操作をすると、それしかなかったという。

いかにひどかったというようなことが、なぜ防げなかったのかというような。これがちゃんとしていたら防げたかどうかというのはわかりませんが、こういうのがちゃんとしていた場合にはもうちょっと軽くなっただけじゃないかという可能性は否定できないということで、そういう意味でこの福島原発事故は人災的な側面がかなり濃厚であるという。それを今後規制を改革する上では、その辺の徹底的な総括が必要であるということで。そのための一つの資料を提供するために内閣官房の事故調というのがあって、国会の事故調〔というのがあって〕。その二つ〔だけ〕じゃなくてあらゆる事故調査を踏まえてどんな場合にも過酷事故を防ぐ体制というのが作れるかどうか、もし作れないとすればもう原発やめるしかないしかない、ということで検討すべきだと思います。そして新しい環境省の原子力安全庁。古い保安院とかそういうのがストレステストとかやって泥縄的に運転再開の材料を得ようとチャンスをうかがって再開の道筋をつけて解体されようという、そういう最後の花道飾ろうとしてるんですけど、それはお門違いで。新しい組織をまず優れた体制で作って、まあ中身が伴うのは十年後とかだと思いますけども、新しい基準を作って全部再審査してそれで ×をつけていくという、これしかないんじゃないかと。だから今の保安院とか信用されないから、何やっても緊急安全対策発表してもストレステストをやっても。NHK なんかアンケートをやって今日発表されるんですけど、大方の周辺自治体は再稼働に NO と言ってるそうです。脱原発にも、半分くらい脱原発でいいですと言ってる。そういう状況で、新しい革袋でやるしかないだろうと思います。

私たちは7月23日に最終報告を出します。まあ中身見れないから、原子炉の中見れないから限界があるんですけども、少しでも役立つような知見を提供したいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

司会：どうも吉岡先生ありがとうございました。政府の事故調査検証委員としてお知りになったことも含め事故の背景と原因ということでお話をいただきました。人災的という言葉もありましたが、あの事故は防げたのではないかという感じを私などは強くしております。いずれにしましても十万人以上の人たちが避難を余儀なくされて難民状態に置かれ家族は引き裂かれという状況が続いているわけですが、そうした福島を中心とした原発事故の被害を受けた方たちの現状、そしてその被害に対する補償及び責任追及の現状について次にお話をいただきたいかと思ひます。(講演(4)へつづく)